



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

クリスマス

シーズン

クリスマスがやってき

ました。心温まるこのシーズンは喜びと愛と贈り物を送るときです。また、友達と家族を思い出すときです。でもそれ以上に私達にとって、クリスマスとはキリストの誕生を喜び、祝うときであります。

キリストは神を通して人となり、私達と共に住んでいました。この話しを信じる人にとって、この受胎の事実が私達に素晴らしき事をたくさん教えています。臨床的にもマリアの妊娠期間の実際の記録は私達の心を引きつけます。私達が中絶について話すとき、しばしば旧約聖書から引用しますが、新約聖書のマリアの妊娠について話し合う事は稀です。これは残念な事です。なぜならば、マリアの妊娠でキリス

トは中絶と生命尊重について、強く、正しいメッセージを伝えていからです。話しは全く明白です。

天使はマリアに言った。「マリア、あなたは身をもって男の子を産む。」マリアは天使にたずねた。

「どうしてそのようなことがありえましょうか。私は男の人を知りませんのに。」

天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き者の力があなたを包むだろう。だから産まれる子は、聖なるもの『神の子』と呼ばれる。」

マリアは何を身ごもったのでしょうか。彼女はイエス(神一人)を身ごもりました。その時から彼女の胎内に別の生命が存在していました。マリアの子宮の中のイエスに当ては

まった事は私達にも当てはまる事です。自然科学では受精の時に私達はすっかり存在し、もう性が決まり、完全に人間であると言われていきます。その時、私達の魂もつくられたと福音書が述べている事を私は信じています。

妊娠後、マリアはエリザベトを訪問するために急いで出発しました。それは今のように交通機関が発達してないので、少なくとも10日はかかる旅行でした。また、電話などいかなる伝達機関もない頃でしたから、エリザベトにとって、マリアの突然の訪問は驚きでした。わずかに妊娠10日目のマリアがエリザベトの家についたとき、

彼女の妊娠をエリザベトはわからなかったはずですが、でも、エリザベトは神のインスピレーションを通して、「私のメシアの母」とマリアを呼んでいます。マリアが単なる母ではな

く、メシアであるイエスを宿していることを認めています。その頃、彼はマリアの子宮の内側にちょうど着床した頃ですから、非常に小さく、やっと、ピン頭のサイズ位でした。エリザベトの言葉はマリアがイエスという赤ちゃんをすでに宮に宿しているという確かな証拠です。この事を通して、人間の生命は、この世に産まれたときではなく、母の子宮に存在したときに始まると神は私達にはっきりと教えています。

中絶について許して、すなわち、友達が中絶すると聞いても黙っていたり、知らん顔していたり、お腹の赤ちゃんを守る運動を何もしないのに、自びり過ごしているのに、自分分はクリスチャンだと言う人は矛盾していると私は思います。マリアの子宮に受胎した瞬間の決定的事実を考えると、中絶は悪

い事だとイエスははつきりと私達に教えているからです。クリスマス前の季節です。マリアの妊娠の不思議な話しを思い出すときです。新約聖書はまだ産まれていない子どもを守る事について力強いメッセージを私達に伝えてくれます。そのメッセージとは受精の瞬間に新しい生命が誕生するという事です。

日本プロ・ライフ・ムーブメント

代表者

ノボトニー・ジェリー

OMI

医師の誓い

ヒポクラテスは誰もが知るとおり紀元前よりずっと昔の医師である。彼は医師の守るべき誓いを考案しました。彼の誓いは3千年後の今日なお、医学生が医師の資格を得る際に唱えられている。ヒポクラテスは異教徒で、この誓いも異教神の前で立てられた物であるにもかかわらず、キリスト紀元後もそのまま用いられている。驚くべき事に、その文句も20年ほど前の部分的改訂を除いては、全く手が加えられていない。一体どのような改訂がなされたのだろうか。

な指示もしない。同様に、婦人に中絶のためのペッサリーも与えないことを誓う。』今日の学生は卒業時、上の中絶に関する一文の代わりに次のごく短い文章を唱えるようになった。『私はどんな違法なこととも決してしない。』これ以外は3千年来そのままだが、中絶の項が書き換えられたのは、誠に遺憾すべき事実である。3千年もの間中絶を禁じてきた倫理観が、この改訂で捨て去られてしまったのだ。考えてみただけで恐ろしい。さらに、今度の新しい倫理観に従って生きる者にとって、医学療法の世界に全く新しい観念が導入されたことになる。これまで、『危害を加えない』ことが

我々医師は国家の法律にのみ従うよう定められている。違法でさえなければ、どんなことをしても構わないという。だが、全ての法律がいつでも正しく道理にかなっているか、果して言い切れるだろうか。40年前のナチスドイツでは、ユダヤ系人を『劣った民族』とみなして死に追いやることを許可するのは医師の役割だった。これは合法行為だった。患者の生命に関わる難しい実験を行うのも医師だった。これもまた合法であった。一体法律が倫理的などといえるだろうか。我々はもつと良識をわきまえているはずだ。法律の名の下に、無数の残虐行為が何世紀にもわたって繰り返されてきた。ヒポクラテスの誓いの中から、人を殺さないという文句は削除され、代わりに『違法行為をしな

いと』という恐るべき言葉が新たに加えられた。このことについて、さらに考えてみる必要がある。

ジョン・ウィルキー
医学博士

うどんを選んだか？

一般の人に強く訴えかける句や言葉の一つに、女性のための「選択の自由」という言葉があります。ここで、この「選択」という言葉について考えてみましょう。

選択肢が一つしかない場合、そこに選択の自由があると言えるでしょうか。一つ例を挙げてみましょう。あなたは、お気に入りのレストランに行くつもりです。いろいろな主要料理の載ったメニューを手渡されはしますが、ウェイターは、うどんしか出来ないと言ったとします。そこで、あなたはうどんを注文するわけですが、これであるならば本当にうどんを選んだと言えるでしょうか。この例はちょっと単純すぎるかもしれませんが、しかし同じような事が、中絶

を行う病院や療養所にやってくる若い女性の上に起こっているのです。

望まずして妊娠してしまった女性は、どうしたらよいかよく分からず病院や療養所に来たかもしれないのです。彼女は、不安で当惑していて、誰かにアドバイスをして欲しいと思っけています。彼女の妊娠が確認せられ、中絶が提案されます。もし、彼女が躊躇したり悲しんだりすると、これが唯一の方法であつて、彼女は最善の選択をしていると確信させられるのです。

しかし彼女は本当に選択したのでしょうか。彼女は自分の妊娠について、胎児について、そして中絶の手順について十分な説明を受けたでしょうか。それが、身体に、精神に、そして感情的にどのような影響を残すか少しでも分かっているでしょうか。彼女は、人生における一大決

心をするのに、十分な時間考え、支持を受け、そしてカウンセリングを受けたでしょうか。

中絶については、はっきりと肯定の立場を取ろうと、否定の立場を取ろうと、中絶する女性の多くは、そうするよりほかに方法がなかったとか、あるいは、それが唯一の方法だったと言っでしよう。しかし多くの女性が他の手段を取りたかつた事を認めていません。中絶賛成の立場が言うところのどこに、女性に対する配慮や同情があるのでしょうか。望まなくして妊娠してしまつた女性に對して丹念に全ての選択肢を提供する心からのカウンセリングがどこにあるのでしょうか。女性の「選択の自由は」どこにあるのでしょうか。

選択肢に關して言うならば、中絶賛成の立場は、「胎児に死を」と言つた一つ一つの選択を提供し、奨

励しているのです。他の選択肢、命を肯定する選択肢も数あるということも、もつと広く知らされなければいけません。私達は、中絶以外の選択、生命の選択という積極的選択がある事に注目しなければいけません。

(HDRC / 92)

親はどう教える？

自分の子どもと性について話しをした事がありますか。何をどのように話すべきか分かっていますか。この話題についてぎこちなさや恥ずかしさを感じた事はありますか。自分が不快に思ふ質問や話しを自分の子どもにしている時、子どもも不快そうにしていますか。自分の子どもに人間の性に付いて教えるのに適した年齢はいつの時でしょうか。

「ママ、赤ちゃんはどこから生まれてくるの」という、最初の典型的な子どもの性的質問に始まつて、先に述べたような質問は、まだ心の準備の出来ていない親たちを恐怖で打ちのめしがちになるのです。この無邪気な質問ははるか昔から繰り返されてきました。4世紀前の一部の親た

ちはこのような私的な問題に付いて、子ども達と「自然に任せて」話し合う必要性を感じていました。しかし今なお、社会がフリーセックスを魅力的に見せている中で、家族の価値を反映する家庭で性教育を行う事を親たちは避けて通れないのです。

あまりにも長い間、親たちは性教育を行う責任を放棄し、他人任せにしてきました。彼らは不快さと未熟さを感じるので、学校に性教育を任せていました。彼らは自ら教育しようと思わないで、ただ良い方向に行ってくれる事を願っているだけでした。そして、自分達の娘が「ママ、私妊娠しちゃった!」と言ってきた時に、彼らは崩れ落ちてしまつのです。

いつでも親たちは自分の子供に、デートやセックスに付いて、「それはしちゃダメ」としか意見を述べず、「なぜか」について

は述べませんでした。就学前の子供には、「私がそう言ったから」という答で十分かもしれませんが、10代の子供にはそれでは通用しないでしょう。

「ただダメと言う」のは使いやすい言い回しでしょう。そう言えば簡単ですが、実際には子供たちになぜ「ダメ」と言うのか、具体的な理由とガイドラインを与えてやらなくてはならないのです。親たちは「ダメ」と言うための教育的道具を家庭内で準備しなくてはならないのです。

フリーセックス教育に価値を認めている人達は、「10代の子供には性的自由を楽しむ権利がある」と叫び、「安全なセックス」というものを促進させています。だからこそ親たちは自分達の子供に結婚しない限り、完全な性的自由はありえないという事を過去の性関係や病気の心配

がなくなるといふ事も含めて、教えてやらなくてはならないのです。現代社会において、性的に感染させられる病気による脅威は現実的なものです。手遅れになる前に、今、子供達が準備する手助けをしてあげましょう。

(HDRC / 92)

《事務所だより》

クリスマスのお喜びを申し上げます。月日の流れは早いもので、1992年ももうすぐ過ぎ去ろうとしています。皆様には今年ほどのような年でしたでしょうか。

私達スタッフ一同は今年一年、皆様から頂いた暖かい気持ちを感じ、感謝いたしております。一年間を振り返ってみると、広い事務所に移れ、ボランティアの方にも恵まれ、高知以外の地区でもプロ・ライフの運動をして下さる方にも巡り会え、ニュース便り、ビデオ、パンフレット、本等の注文も徐々に増え、一人一人まだ産まれていない赤ちゃんの人権を大切に考えてこの運動を行ってくれて、喜ばしいことです。多くの方々にこのプロ・ライフの運動は支えられていると感じるこ

のできる日々でした。来年は今年よりももっともつとこの運動を広めたいと希望を抱いております。そのためには皆様のご参加が必要です、どうかよろしくお願い申し上げます。それでは、新しい年をお健やかに迎えにられますようにお祈り致しております。

日本プロ・ライフ・ムーブメント